

序論)

皆さん、絶望という言葉聞いて、何を思い浮かべるでしょうか。人生で困難に直面し、先が見えない暗闇に放り込まれたような状況になったとき、私たちは「絶望」を感じます。ある人は病気の診断結果に絶望し、またある人は人間関係が壊れたり、愛する人を失ったりするときに絶望することもあるでしょう。さらに、世の中のニュースで政治の腐敗や戦争の状況などを見て、この世界そのものに希望を失うこともあります。

しかし、先ほど読んでいただいたイザヤ書 57章 15-21節では、絶望の中にいる者に対する【主】の語りかけが記されています。この箇所は、高く、聖なる神さまが絶望の中にいる人と共にいてくださるといふのです。

今日のテーマは「絶望する者への福音」です。この福音は単なる慰めではなく、私達を深い絶望から引き上げる力があります。聖書を通して、この福音の本質と、私達を救い出してくださる神さまについて学んでいきたいと思ひます。

1) ちりを生かす聖なる方

まずは 15 節の前半の部分を読みましよう。

**57:15a** いと高くあがめられ、永遠の住まいに住み、その名が聖である方が、こう仰せられる。

今日のみことばを理解しようとするとき、まずは神さまが聖なるお方であることを理解しなければいけません。みなさん、「聖」とはどのような意味があるでしょうか。そう聖書がいうところの「聖」とは「切り分ける」とか「区別する」という意味があります。多くの人イメージする「きれい」とか「清潔」とは違います。

ここで神さまを示すために言われている「いと高くあがめられ、永遠の住まいに住み、その名が聖である方」というのは、神さまは、私達がどんなに頑張っても、何をしてても、絶対にふれることができないお方。決して一緒にいることができないお方であるということです。

旧約聖書のレビ記には神さまが聖なるお方であることがよく示されています。例えば神さまと会うための天幕の中で、一番聖なる場所とされている至聖所に入れるのは、祭司の中でもアロンの子孫である大祭司一人だけで、それも年に一回しか入ることができません。これは、それだけ神さまが聖なるお方であり、私達が会うこと

が出来ないお方であることを示しています。

また、食べ物に聖なる物と汚れた物を区別する律法や、ツアラアトになった人が癒やされるまで隔離されるといった律法も、聖なるお方と汚れた物は一緒にいることができず、区別されなければいけない。ということをお教えるためのものでした。

他にも旧約聖書のサムエル記や歴代誌をみると、神さまの臨在の象徴である契約の箱を迎え入れようとしたとき、本当は神さまに聖別されたレビ人たちが肩に担いで運ばなければならなかったのに、人々がその箱を牛車に積んで運んだところ、牛車がくぼみに落ち込んで契約の箱が落ちそうになったとき、ウザという人がこの箱を押さえたら、その人は神さまに打たれて死んでしまった。という出来事が描かれています。この事も神さまが聖なるお方であり、人間の自分勝手な方法では神さまに触れることができないことを示しています。

みなさん、神さまは聖なるお方であり、本来、私達が触れることも、交わることも、ましてや一緒に住むことなんて絶対できないお方なのです。

ところが、その聖なるお方が何をしてくださるといっていますか？15節の後半を読みましょう。

**57:15b**「わたしは、高く聖なる所に住み、砕かれた人、へりくだった人とともに住む。へりくだった人たちの霊を生かし、砕かれた人たちの心を生かすためである。

本来、私達と一緒にいることなど絶対出来ないはずの聖なるお方が、「砕かれた人」「へりくだった人」と共に住んでくださると言われています。

みなさん「砕かれた人」「へりくだった人」とはどう云う人の事でしょうか。

普通、私達が「へりくだる」というと、例えば私は元コンピュータエンジニアでしたから、パソコンやインターネットなどのことについてある程度詳しいのですが、他の人から「本多先生ってコンピュータに詳しいですよ」と言われた時「いえいえ、私なんてまだまだですよ」って応えるのが、日本人的な「へりくだる」だと思います。でも、聖書がいうところの「砕かれる」「へりくだる」というのは違うのです。

「砕かれた人」というのは「ちり」とされた人のことで、別の言い方をすると徹底的に後悔をしている人のことです。

また「へりくだった人」というのも、本当は力があるけども謙遜している人のことではなくって、「さげすまれた人」「卑しい者にされた人」のことで、自分から謙遜

しているのではなく、徹底的に馬鹿にされ、軽んじられ、倒された人のことを指します。

つまり、聖なる神さまが共に住んでくださる「砕かれた人」「へりくだった人」というのは肉体的にも、精神的にも、そして霊的にも徹底的にボロボロにされ、後悔のどん底に落とされ、一切の尊厳を失っているような絶望の中にいる人のことです。

神さまは聖なところに住んでおられるはずのお方なのに、絶望のどん底にいて自分では立ち上がることもできないようなボロボロの状態の人と共に住んでくださると言われるのです。

なぜならば、【主】は、そのボロボロになった人の霊を生かし、心を生かしてくださるからです。

みなさん、私達は今、アドベントの期間にいます。聖なる神のひとり子である【主】イエスキリストはなぜ、私達のところに来てくださったのでしょうか。それは罪によってボロボロになっている私達の霊と心を生き返らせてくださるためです。

だから、神さまは16節のようにいわれています。

**57:16** わたしは、永遠に争うことはなく、いつまでも怒ってはいない。わたしから出た霊が衰え果てるからだ。わたしが造ったいのちの息が。

「永遠に争わない」というのは、いつまでも私達を断罪し続けることはない。ということです。みなさん、神さまは永遠に生きておられるお方ですから、私達の罪を永遠に責める事ができるお方です。でも、神さまはその怒りを鎮めて、私達を断罪し続けることをやめてくださると言われています。

なぜでしょうか。それは罪に染まった私達の中に、神さまから与えられた霊を見てください。創世記をみると、私達人間は神さまの息を吹きかけられて造られたと描かれています。この息とは、霊と訳すことができる言葉が使われています。私達は神さまの息によって霊を入れられて造られたのです。

そして、神さまが私達に与えてくださったこの霊は、罪によって衰え果ててしまっています。また、その霊によって造られている息・・・つまり、私達の魂も罪によってボロボロにされており、チリとされ、蔑まれた状態になっています。

みなさん、罪というものは、私達の霊と魂を根本から弱らせ、衰えさせ、ボロボ

口にするのです。そして、神さまはそのボロボロの私達の霊と魂を見ていられず、私達を生かすために、怒るのをやめ、私達を断罪することをやめてくださるのです。

神さまは、私達の霊を生かすために、聖なるお方であるにも関わらず、私達のところに住んでくださるのです。みなさん、これは福音、以外の何者でもありません。

## 2) 不正を見てもなお癒やしてくださる方

神さまは、私達の罪深さを知らないで私達のところに来てくださるお方ではありません。17節、18節を読みましょう。

**57:17** 彼の不正な利得の咎のために、わたしは怒った。

わたしは顔を隠して彼を打ち、そして怒った。

しかし彼はなお背いて、自分の思う道を行った。

神さまは義なるお方ですから、私達が罪を犯し、咎を負う時、それに対して怒りを燃やし、私達を打たれます。それは私達が罪を犯さないようになるためです。

しかし、罪深い私達はそれでも、【主】に背いて罪を犯してしまうのです。

アウグスティヌスという人は、自分が欲望をコントロールすることができず、駄目だとわかっているにもかかわらず罪を犯し続けてしまうことに非常に苦しんでいました。

また、信仰義認を発見したルターも自分の力では神さまが求めておられる義を実現することができないことで苦しんでいました。彼は元々カトリックでしたから、いわゆる懺悔とよばれる自分の罪を祭司に告白することを何回もやって、いくら罪の告白を繰り返しても罪がなくなることに絶望したのです。

さらには、パウロもこのようにいっています。ローマ人への手紙を読みます。

**7:18** 私は、自分のうちに、すなわち、自分の肉のうちに善が住んでいないことを知っています。私には良いことをしたいという願いがいつもあるのに、実行できないからです。

**7:19** 私は、したいと願う善を行わないで、したくない悪を行っています。

**7:20** 私が自分でしたくないことをしているなら、それを行っているのは、もはや私ではなく、私のうちに住んでいる罪です。

**7:21** そういうわけで、善を行いたいと願っている、その私に悪が存在するという

原理を、私は見出します。

私達はどうしても罪を犯しつづけてしまいます。そして、そのことに気づくとき、アウグスティヌスが苦しみ、ルターが苦しみ、パウロが苦しんだように、私達は霊的に絶望し苦しむのです。でも、【主】はそのような者のためにいわれます。イザヤ書にもどって18節を読みましょう。

**57:18** 彼の道を見たが、それでもわたしは彼を癒やす。

わたしは彼を導いて、彼とその嘆き悲しむ者たちに、慰めを報いる。

【主】は罪を犯してしまう私達のボロボロの状態をみて、「それでもわたしは彼を癒やす」といわれます。私達はいわば「罪を犯す病<sup>びょう</sup>」にかかり、罪を犯し続けてしまいます。そんな私達を神様が癒やしてくださるということは、私達が罪を犯さないでもいいようにしてくださるということです。

【主】は、そのために私達を導いて罪から離れさせ、悲しむ私達に慰めを与えてくださるのです。

みなさん、ここでイザヤ書53章のみことばを思い出してみましょう。

**53:4** まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った。それなのに、私たちは思った。神に罰せられ、打たれ、苦しめられたのだと。

**53:5** しかし、彼は私たちの背きのために刺され、私たちの咎のために砕かれたのだ。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに、私たちは癒やされた。

イエス様は、「罪を犯す病」の私達を癒やすためにこの地上に来られ、十字架にかかられました。だから、このお方を信じる時、私達は新しく創り変えられ、新しくされるのです。

### 3) 証しと賛美と平安を与えてくださる方

神さまは言われます。19節

**57:19** わたしは唇の実を創造する者。

平安あれ。

遠くの者にも近くの者にも平安あれ。

わたしは彼を癒やす。

——【主】は言われる——

「唇の実を創造する」というのは、【主】に救われたことを証しできるようにしてくださいということであり、救われたことを示す。感謝の賛美を歌えるようにしてくださいということです。

私達が、神さまを心から賛美できるということは、神さまが私達をそのように新しく創ってくださった証拠なのです。そして、この創造は、ユダヤ人だけでなく、私達のような異邦人にも与えられている恵みです。「遠くの者にも近くの者にも平安あれ。わたしは彼を癒やす。」というの、ユダヤ人だけでなく、私達も救ってくださることを示しています。

だから、私達は神さまを賛美するのです。

#### 4) それでも敵対する者には平安がない

ここで語られていることは、私達、人間の努力によって与えられるものではなく、神さまからの一方的な恵みです。神さまは聖なるお方なので、神さまから一方的に与えられる恵みによらなければ、私達は救われて本当の平安を持つことはできないのです。では、この神さまの恵みをそれでも拒否し、神さまからの福音に逆らったらどうなるのでしょうか。20節、21節を読みましょう。

57:20 しかし、悪しき者は荒れ狂う海のようなだ。

まことに、それは鎮まることができず、その水は海草と泥を吐き出す。

57:21 悪しき者には平安がない。

——私の神はそう仰せられる。」

20節の「悪しき者」というのは、単純に罪と訳してもいいですが、神さまに逆らう者のことを指しています。神さまから恵みの福音が与えられているのに、それでも【主】に逆らったらどうなるのでしょうか。

罪によってその人の霊の衰え、魂がボロボロの状態のままで癒やされることがなく、罪という泥が心の中に溜まったままで、平安がない状態が続きます。

だから、神さまは、神さまから差し伸べられた福音を受け取って、癒やされないさいと私達に語りかけてくださっているのです。

## 結論)

みなさん、【主】は聖なるお方です。本来、私達と決して一つになることができない。交わることも、触れることもできない、特別に区別すべきお方なのです。

その聖なるお方が、私達が罪によって砕かれ、絶望し、ボロボロになっているのを見過ごされずに、私達と共に住むと伝えてくださっています。

そして、そのために送り出されたのが【主】イエスキリストです。

このお方は、私達の罪の病を背負い、私達を癒やし、私達に本当の平安をくださいました。

だからみなさん、誤解される言い方になるかもしれませんが、多いに絶望してください。自分がどれほど罪深く、神さまと交わることができない存在なのかを後悔してください。【主】は、そんなみなさんのところへきて、皆さんを癒やし、本当の平安を与えてくださるのです。

逆に言うと。自分はちょっとの罪を犯しているかもしれないけど、そんなひどいことをしていない。といった程度の罪に対する認識だと、神さまがどれほど素晴らしい救いを与えてくださったのかはあまりわからないかもしれません。自分の罪深さを知るのは、神さまの憐れみ深さを知るチャンスなのです。

みなさんは罪に絶望されているでしょうか。そのみなさんのところに【主】は来てくださり、共に住んでくださっています。その恵みによってまことの平安を得ましょう。みなさんがどれほど罪深くても、神さまはそれを承知で、キリストを送り、みなさんを癒やしてくださったのです。

アドベントのこのとき、この主の恵みに感謝して、その素晴らしさを証し、賛美しましょう。